

野口 潤次郎 氏

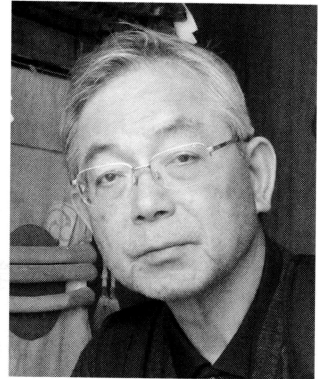
この度は、栄誉ある日本数学会出版賞をいただき、たいへん有り難く存じます。書いてきたのは、大学生あるいは大学院生向けのいわば専門書、一般向けのものではないので出版賞をいただけたとは思ってもみませんでした。まずは、推薦書を書いて下さった方がおられるわけで、その方を始めとして、関係者に心より感謝申し上げます。

丁度干支で一回り前の2013年（平成25年）の春に定年退職しました。その頃、英文の本二冊の出版に注力していて、講義はしばらくお休みという状況になりました。時折ある、集中講義や研究集会でのレクチャーシリーズのようなものは本の原稿の確認の意味もあったので引き受けましたが、基本無職で、そのままズーッと今に至っています。日常的には、自分の専門の研究時間以外は、現役時代の講義や委員会に充てていた時間を、全て本を書くことに振り向けた生活を送ってきましたので、今回の受賞の連絡を受けたときは、たいへん嬉しい気持ちになりました。改めて、感謝です。

本を書くということは、もちろん分かっていることを書くのですが、それを順序よく組み立てて、分かりやすく記述する、というのは非自明です。‘うまい証明’を探すのは、それが他の人のものでも、時に自分の工夫した別証明でも、かなり面白く、それを‘うまく書けた’時は、「ヨーシッ」と結構な満足感が得られます。

受賞理由にある「岡潔の数学」は、正にそのような対象です（内容については、ちょうど雑誌『数学』第77巻3号に拙著論説が載りますので、それをご覧ください）。多変数複素解析の基礎理論なのですが、どういうわけか基礎理論として学部学生向けに書かれた本があまりなかった。自分が学生の頃は、あっちを読み、こっちを読みして、つなげて自分用のノートを作るという状況でした。現役のころ、既存の教科書を色々参照しながら講義をしていて、入門基礎であるにもかかわらず、いつも不満足感が残るのが「解析的部分集合」の話でした。その基礎は、岡の三連接定理です。日本の数学の宝である岡数学をこのままにしておくのはもったいない、と思ったのが動機でした。

さて、これでどの程度‘うまく書けたか？’は読者の判断を待つしかありませんが、個人的には、もう既に正則関数の定義で書き改めたいところが出てきています。やはり、分かっていることを書くのではあるが、書いてみないと分からないことがある。将来、もっと‘うまい本’が出てくることを期待しています。



野口 潤次郎
東京大学名誉教授／東京科学大学名誉教授